

## ヘルダーリンのライン讃歌における詩的世界

### —— 時と永遠の諸相 ——

小 林 繁 吉<sup>※</sup>

ヘルダーリンの後期讃歌中、最大の作品の一つに数えられる自由韻律詩「ライン」は、1801年に作られたと言われている。祖国の歌の一つであり、また河流詩の一典型でもある「ライン」は、ヘルダーリンの詩的世界を如実に示しているのであるが、それだけに作品解釈上問題となる点も少なくない。ここではその問題点をいくつか取り上げて考察していきたい。讃歌「ライン」における詩的世界の意味を、時間と永遠の諸相から見ていきたいと思うのである。

それでは「ライン」を全体的に眺めてみたい。まずこの「ライン」は友人イザーク・フォン・シンクレアに捧げる歌になっている。全体は十五節になっていて、三節が一段となって内容的にまとまりを見せており、従って全体は五段に分かれると考えられる。以下各段ごとに詩全体の流れを順を追って見てみようと思う。テキストは『シュトットガルト版大全集』第二巻<sup>1)</sup>である。

第一段では、アルプスの高みで生まれたライン河は、その神的なものに由来する高貴さのために、自由を求めて果敢に突き進む。その情景が余す所なく描写されている。「半神の荒れ狂い。」*Das Rasen des Halbgotts.*「あの声は河流の最も高貴なもの、自由に生まれたラインの声だったのだ、」*Die Stimme wars des edelsten der Ströme, / Des freigeborenen Rheins,*「しかし最も盲目なのは神々の息子たちなのだ。」*Die Blindesten aber / Sind Göttersöhne.*などの詩句にその様子が顕著に示されている。

「純粋に生まれたものは謎なのだ。」*Ein*

*Räthsel ist Reinent sprungenes.* で始まる第二段は、ラインの生まれの純粋さと神聖さをさらに讃え、神的な力がそれを制御しないならば、大地を引き裂き、山をも崩す程の勢いをもつラインを、父なるライン<sup>2)</sup>として、静かにドイツの諸都市に恵みを与えるラインの形象へと変化させている。特に第五節ではギリシア神話のヘラクレスの姿と二重写しになったラインが現われている。「その様な鍛冶場で純粋なものはすべてきたえられるのだ、」*In solcher Esse wird dann / Auch alles Lautre geschmiedet,* という詩句が印象的にこの段の事情を表明している。

第三段では、根源を忘れぬラインの姿が描かれ、ヒュブリスのテーマが扱われている。「そして神々と等しくなろうと思った。」*Und den Göttern gleich zu werden getrachtet.*「彼ら（神々）と等しくなろうと欲し、等しくない事に甘んじなければ、」*Wenn einer, wie sie, seyn will und nicht / Ungleiches dulden,* などの詩句がそれを示している。しかし、神々は英雄と人間と死すべきものたちを必要としている事が歌われ、さすらいの果てに、運命との争闘の末に、彼（ライン）は静かに休らう事ができると言っている。「分相応の運命を見出したものは、」*welcher fand / Ein wohlbeschiedenes Schicksaal,* という詩句がここでは重要な役割をしていると思われる。詩想と詩調はここから大きく転換し、もはやライン河についての具体的な事は何一つ述べられない。

第四段は唐突に「私は今半神たちの事を思う」*Halbgötter denk' ich jezt* で始まって、半神達の一人と見なされているルソーを歌い、讃えて、第

<sup>※</sup> 八戸工業大学一般教育部